

IMPERIAL

Number 115 2021



「巻頭エッセイ」

覚和歌子
重金敦之

「連載」

出久根達郎
角田光代

門井慶喜

文化の花
大阪の明治、
大正、昭和

大阪に2度目の
「万博」がやってくる

「新・和の伝統」

彩の国のシャフト

「東京料理長杉本雄の「学」」

対談 杉本博司×杉本雄

More Imperial
than ever

13th

歴史にふさわしく
未来にふさわしく



「龍の起源」(荒川 緋著、伊豆屋書店)
 龍とはいったい何ものか。東西で概念の全く異なる龍
 を世界中の神話・伝説・絵画などから調査してゆく。
 著者は科学思想史を専門とする静岡大学名誉教授。



龍に呼ばれて 覚和歌子

【作詞家・詩人】

古

今東西の物語において、水を司り権力や豊饒など多くのシンボルになぞらえられる龍は、私たちの想像をかきたててやまない存在である。メソポタミア神話では、水の神ティアマトなる龍が英雄によって真二つに切り裂かれ、千切れたそれぞれが天と地とに生成したという。そんな「龍の起源」なる本を心躍らせながら読んでいたちょうどその時、奈良県の天川村を取材して詩を書くという仕事舞い込んできたのだった。

を経営するMさんは、
 武田T矢を思わせる
 濃い目の風貌で地区

議会議長もされている。気さくで話し好きなお人柄で、こちらのスタッフを早くもちゃん付けて呼んでは、何くれと世話を焼いてくれている。

「取材がうまく運ぶように、良い作品が生まれるように、まずは洞川地区を守護してください」ご挨拶に行きましよう」そう言うつその名も「龍泉寺」だった。天井に日本画の龍がのたうつお堂の中でMさんの唱える般若心経を聴きながら、あの本の導きを思わずにいられない。

集落の中央を通り抜ける川幅1.5メートルほどの山上川は胸がすくほどに透明で、さながら水面に神気をたたえているよう。洞川には美しい湧水地がいくつもあると聞く。中でも日

本名水百選にも名を連ねる「ごろころ水」は、ミネラル分を多く含み古くから万病を治す神の水と言われている。言伝えは実効を引き寄せいつしか日本中に広まった。水を汲みに人が集まるようになったことから、湧水口と駐車場を整備し管理するようになったのも実はMさんだった。維持費に充てるためやむをえず水を販売することにしたというその金額は、送料の方が高いほどである。

地図を覗き込もうとしてMさんと頭を突き合わせる格好になった時のこと。Mさんから一条の清浄な気が流れてきてはつとした。武田T矢の風情に似つかわしくない冷涼で透明なエネルギー。多分Mさんが毎日飲んでに違いない「ごろころ水」の、もしかしてこれが効用なのだろうか。火と水で「神」を指すという。この地の火(ガソリンスタンド)と水を司っているMさんは、もしかして洞川の守り神の一番近くにいたのかもしれない。目を上げると、集落を見下ろす山の斜面に天へと屹立する濃緑の杉の木立があった。山上川の淀みない水流の横軸と、垂直な木々の縦軸が私の中でふとイメージを結んだ。あの本の

神話の二つに切り裂かれた龍ティアマトは、片や一筋の大河となって地を這い、片や一本の巨木となって天に向かったのではないか。
 そうして天と地は形作られていったのではないか。

洞川を去る朝、晴れた空は饑餓のような雲を浮かべてくれた。長くて太いじゃばらの胴体の先端には、誰が見てもわかる龍の顔が大きな口を開けていた。

あれからずっと「ごろころ水」は我が家の健康を支えてくれている。

覚和歌子(かく・わかこ)

山梨県出身。早稲田大学第一文学部卒業。作詞家として多くの歌手に作品を提供。二〇〇一年「千と千尋の神隠し」の主題歌「いつも何度でも」作詞で日本レコード大賞金賞受賞。二〇〇九年、舞台「届かなかったラブレター」(主演/井上芳雄・クミコ)を構成・演出。二〇一五年から谷川俊太郎とライブ対詩を上演。詩作を中心にマルチな活動を展開している。



© 深堀 瑠璃

インペリアル・モノローグ